

Title	「習慣」概念を基礎とした社会学理論の構築
Sub Title	
Author	村井, 重樹(Murai, Shigeki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2005
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.60 (2005.) ,p.147- 149
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成16年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000060-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

よって矛盾なく利用することのできる連続的なコミュニケーション財の、媒介としての機能の謂いだ。

この論文は身体概念に特化したものだが、当然この立場は人格を論じる際にも用いることができるため、本研究の基本的な前提を整備するものとして貢献している。

言及文献

- 蘭 千壽・外山みどり編, 1991, 『帰属過程の心理学』ナカニシヤ出版。
 坂西友秀, 1998, 『自己と他者の視点の違いと帰属過程』風間書房。
 Coulter, J., 1979, *The Social Construction of Mind: Studies in Ethnomethodology and Linguistic Philosophy*, Macmillan. (=1998, 西阪仰訳『心の社会的構成——ヴィトゲンシュタイン派エスノメソロジーの視点』新曜社。)
 Heider, F., 1958, *The Psychology of Interpersonal Relations*, John Wiley & Sons.
 平田俊博, 1997, 「人格」有福・坂部他編『カント事典』弘文堂。
 黒田 亘, 1992, 『行為と規範』勁草書房。
 Locke, J., 1694, *An Essay Concerning Human Understanding 2nd ed.* (=1980, 大槻春彦訳「人間知性論」大槻春彦編『世界の名著 32 ロック/ヒューム』中央公論新社。)
 Luhmann, N., 1984, *Soziale Systeme*, Suhrkamp. (=1993-1995, 佐藤勉監訳『社会システム理論』恒星社厚生閣。)
 ———, 1988, "Closure and Openness", Gunter Teubner (ed.) *Autopoietic Law*, Walter de Gruyter.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

「習慣」概念を基礎とした社会学理論の構築

村 井 重 樹*

1. 研究概要

筆者の研究課題は、「習慣」概念を基礎とした社会学理論の構築である。その理論構築を進めていくために必要とされる研究は、大別して以下の三つであると考えている。それは、①「習慣」概念の社会学史的位置付け、②行為としての習慣、③習慣と社会構造である。

まず、①の習慣概念の社会学における位置づけであるが、これは、これまでの社会学理論の中で、「習慣」という概念が、どのようなものとして扱われ、社会学にとっていかなる意味を持っていたのかを検討することを目的とする。この検討を通して、これまでそれほど注目してこなかったと思われる「習慣」概念が、社会学理論にとって持つ意味と意義を見出せると考えている。

次に、②の行為としての習慣であるが、これは習慣的になされる行為を社会的にどのように分析していくかを探求しようとするものである。習慣としての行為を社会的にどのようなものとして捉え、それを理論的にどのように分析できるかを検討するのが目的となる。

最後に、③の習慣と社会構造であるが、これは社会的条件に大きく影響を受けて形成された習慣（あるいは習慣的行為）が、社会構造と結びついたときに生じる諸問題、例えば支配や権力関係といった問題の分析を行うことが目的となると考えている。習慣あるいは慣習は時間をかけて形成されるものであることから、それらが持つ歴史性とも関係させながら、分析枠組みを構築する必要があると思われる。

以上の三つを総合的に研究し、理論化することが目標であるが、目下のところ、②の行為としての習慣を中心として研究を進めている。そして、その成果として「習慣と行為—ブルデューとミードの観点から—」(2004『現代社会理論研究』第14号)を発表した。以下その概要を説明していく。

2. 習慣と行為

社会学理論のなかで、習慣という観点を積極的に採用した理論家としてP・ブルデューがいる。彼は、その理論の中核に「ハビトゥス」概念を置いている。ブルデューによれば、「ハビトゥスとは、持続性をもち移調が可能な心的諸傾向のシステムであり、構造化する構造として、つまり実践と表象の産出・組織の原理として機能する素性を持った構造化された構造である」(Bourdieu [1980=1988: 83])。「習慣と行為」論文においては、ブルデューの「ハビトゥス」概念を中心にして、行為としての習慣の展開を図った。

そして、ブルデューのハビトゥス概念の検討していくことで、より広く「習慣」という視点から行為を捉えていくために、ブルデューとG・H・ミードの社会的行為に関する理論を、特に、「習慣」という位相に着目して比較検討を行った。この両者の比較検討によって目指したのは、行動主義心理学のような単なる刺激—反応図式とは違った視点から、習慣による行為を分析する道を探ることであった。

また、同時にここで目指したのは、ブルデューのハビトゥス概念に対する批判を克服する道を探ることでもあった。ブルデューのハビトゥス概念には、変動を説明することのできない決定論であるという批判が多く寄せられている。しかし、ブルデューは、ハビトゥスが単なる構造の反復に過ぎないという説明は退けている。では、なぜそうした批判がたびたびなされるのであろうか。それは、ブルデューがその内実の論理を説明できていない、あるいは説明していないという点に一因があると考えられる。ブルデューはその点不十分であり、批判を寄せる論者たちにも共感できる部分がある。それゆえ、そうした批判の克服を図り、習慣としての行為をよりダイナミックなものとして捉えていくために、ミードの論点を必要とした。

この論文で示そうとしたのは、ブルデューがハビトゥスを社会的条件の機械的反復に陥らないとしながらも、その分析が構造の再生産過程に集中したために十分展開できなかった視点を、いかにして適切にその理論に組み込んでいくかということであった。ブルデュー同様、ミードも行為の習慣性に注目をしていた。さらに、ミードは、行為において「新奇なもの」が生じるプロセスに焦点化してもいた。そこで、ブルデューのハビトゥス概念とミードのI/me概念の類似性を通して、ブルデューのハビトゥス概念が抱える不十分な点、つまりハビトゥスからいかに「新奇なもの」が生じるかという問題を適切に論じられるように、修正を図った。また、ブルデューがハビトゥス概念から省いてしまった反省性の問題を同じくミードの視点を通して、ハビトゥス概念に組み込む道を示そうとした。こうして、両者の比較を通して、習慣としての行為をよりダイナミックに、より柔軟なものとして理論的に展開していく可能性を論じたのである。

3. 今後の課題

以上のように、これまでにおいては、行為としての習慣をいかに理論的に捉えうるかということを中心に研究してきた。それゆえ、こうした行為の問題が、社会構造といかに関わるかということに対しての検討がなされていない。今後、社会構造との習慣の関係を理論的に分析する体系の構築を行う必要が

ある。また同時に、これまでの社会学理論における「習慣」概念の位置も検討し、その知見を生かしながら、理論構築をしていくことが重要となろう。その意味で、冒頭で述べた三つの視点からの総合的な理論枠組みの構築が要請されるであろうと思われる。

参考文献

- Aboulafla, M., 1999, 'A (neo) American in Paris: Bourdieu, Mead, and Pragmatism', *Bourdieu: a critical reader*, Blackwell.
- Bourdieu, P., 1980, *Le Sens Pratique*, Les Editions de Minuit, 今村仁司ほか訳『実践感覚』1・2 みすず書房 1988・1990.
- Bourdieu, P. and Wacquant, L., 1992, *An Invitation to Reflexive Sociology*, The University of Chicago Press.
- Camic, C., 1986, "The Matter of Habit" *American Journal of Sociology*, 91: 1039-1087.
- Crossley, N., 2001, *The Social Body: Habit, Identity and Desire*, Sage Publications.
- Crossley, N., 西原和久訳, 2002 「ハビトゥス・行為・変動—ブルデューの批判的検討—」 pp. 329-357『現代社会学理論研究』第12号.
- King, A., 2000, 'Thinking with Bourdieu Against Bourdieu: A 'Practical' Critique of the Habitus' *Sociological Theory*, 18: 3.
- 近藤敏夫 1990 「G・H・ミードの社会性概念—時間次元の導入—」 pp. 111-125『社会学史研究』
- Mead, G. H., 1934, *Mind, Self and Society*, The University of Chicago Press, 河村望訳『精神・自我・社会』人間の科学社 1995.
- 小川英司 1997 『新版 G・H・ミードの社会学』いなほ書房.
- 小川英司 2001 「G・H・ミード——プラグマティズム・ヘーゲル・発生論」 pp. 89-101『社会学理論の〈可能性〉を読む』情況出版.
- 荻野昌弘 2000 「文化とプラティック」 碓井 崧ほか編『社会学の理論』有斐閣.
- 宮島 喬 1994 『文化的再生産の社会学』藤原書店.
- 徳川直人 1993 「行為・時間・自己—G・H・ミードの『リフレクション』への『行為の観点』からの再接近」 pp. 16-29『社会学評論』44-1.
- Wacquant, L., 1992, Toward a Social Praxeology: The Structure and Logic of Bourdieu's Sociology, 1-59 in *An Invitation to Reflexive Sociology*, The University of Chicago Press.
- 山下雅之 2003 「ピエール・ブルデューの社会学的遺産」 pp. 382-398『環』Vol. 12 藤原書店.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会専攻博士課程

高度化（2003年）研究報告

長 野 慎 一*

本研究は、M. フーコーと J. バトラーの所論の検討から性的アイデンティティを強制する近代の権力のあり様とそれに批判的な倫理の可能性について理論的に考察することを目的とする。

フーコーは、近代の権力の形式を生—権力（身体の規律=解剖—政治学/人口(種)の調整=生—政治学からなる）として析出した (Foucault, 1976=1986: 176)。セックスは「〈生に基づく政治的テクノロジー〉のことごとく発展を見た二つの軸の繋ぎ目に位する」(Foucault, 1976=1986: 183-4) ののである。「正常化を旨とする社会」(Foucault, 1976=1986: 182) は、「人間」を生産するが、この「人間」の公式の資格の有無を左右するのが、セックスと同一視された各人のアイデンティティなのである。